

新技術説明会を開催

研究の成果に熱い視線

106社が参加

本学と科学技術振興機構（JST）が連携した「日本大学 新技術説明会」が6月11日に東京・市ヶ谷のJSTホールで開かれた。本学の研究・開発の成果を企業などに披露する絶好の機会で、今回は2年半ぶりの開催。今年度で終了する日本大学学術戦略プロジェクト（研究プロジェクト）関連の新技術が一挙に6件発表される。合計106社の開発関係者が延べ301人が参加し、お目当ての研究者とさっそく相談に入る姿が目立った。



未公開特許の初披露も加わって、企業関係者の熱いまなざしがそそがれた新技術説明会

研究プロジェクトは、本学の5学部で4年前に鳴り物入りでスタートし、「ナノ（10億分の1）物質を基盤とする光・量子技術の極限追求」を5年間の指定研究に取り上げて、革新的科学技術の実用化に取り組んできた。

その中で今回公開されたのは、情報系、工学系、エネルギー、医療分野の計6件。とりわけ鈴木薫・理工学部教授の「ナノ・マイクロバブルの粒径を均一に可変制御する

吐出ノズルと発生装置の開発」と、浅井朋彦・同学部准教授の「磁化プラズモイドの繰り返しパルス生成による新規製膜法の提案」の工学系2件は、未公開特許の初披露とあって関心の的。さらに発がん性の心配のないiPS細胞の誘導に向けた舩廣善和・生物資源科学部専任講師の「タンパク質の寿命を延ばす方法の開発」や、遺伝子配列をターゲットにした福田昇・大学院総合科学研究科教授の「新規バイオ医薬品ヒロール・イミダゾール・ポリアミドの創薬」といった海外出願案件も注目された。

すでに7件の相談

同説明会は本学の研究成果と社会ニーズを積極

的にマッチングさせるのを目的に、本学とJSTの共同主催で開催されており、今回は工業製品や化学製品、医薬品などの製造業とエンジニアリング関係の企業関係者が来場。発表直後には共同研究開発の申し出や問い合わせなど7件の相談が相次いでおり、順調な滑り

出しとなった。本学の産官学連携知財センターの金澤良弘副センター長（大学院知的財産研究科教授）はあいさつの中で「過去15年間に本学が国内外で出願したのは延べ2400件余りで、技術移転は昨年度までで398件」と語り、「最終年度を迎える研究

プロジェクトの内容は今後も積極的に発信し、企業との共同研究や技術の転用を通して、その成果をいかしていきたい」と力説した。

掲載日付：2013年7月15日
媒体：日本大学広報 第653号